

---

# 背中の毒虫

紙村弘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背中の毒虫

### 【コード】

N8356J

### 【作者名】

紙村弘

### 【あらすじ】

柚木薫は引きこもりの青年。ある日、《レンタルお姉さん》と名乗る坂上穂波と出会う。

これは、二人と薫の影をめぐる話。

**(前書き)**

フィクションです。だれもかれも、なにも関係ない

もはや俺は完全に近づいている。今、そう思う。

断食七日目。始めてから三日目で食欲を脱し、五日目には何をせず、何も考えないことに幸福すら感じていた。

いまや完全に生きていくことへの執着を断ち切った。

「これであいつともお別れだ」

そうつぶやくと、外は晴れていたのに幸福感が満ちてきて、まどろんできた。

気が付くと俺は暗い森の中を歩いていて、その中でもう何日も歩き通しであまりの疲労感に力尽きその場に倒れる。

力が入らなくなってその場にずっと倒れていると、目の前に一匹のカラスが降り立った。

そのカラスの目が、確かに「お前が死ぬのを待っている」と俺に告げる。

カラスは時間の経過と共に俺の周りにどんどん集まってきた。目で追えずとも音と気配で十匹以上のカラスが俺を取り囲んでいる。

見えずとも確かな悪意。「食ってやろう」と奴らは言う。彼らは決してギャアギャア鳴いたりはしない。ただ、その目が俺に言う。

すると、一羽のカラスが枝から飛びたち、俺の背中に着地した。

そのカラスは鋭いくちばしで、背中をついばみはじめる。それを合図に見たほかのカラス達が一斉に俺に取り付いて、あちこちついはみ始めた。

抵抗できる体力など一切俺に残されていなかった。

着ていた服を破かれ、奴らはガツガツ俺の肉を食う。痛覚は確かにあつたが、ほとんど麻痺していた。

カラス達は時々争いながらも、口ばしを真っ赤にしてどんどん俺の肉を食っていく。

皮を剥がし、肉をつまみ、内臓をつつき、何の間違いか目玉まで

抉り「こらこらそれは食べ物じゃないぞ」と言おうと思ったが、喉も破られていたただ空気がひゅーひゅー漏れるだけだった。

木々の間から僅かに漏れていた光はいつの間にか消えていて、奴らは骨だけを残して俺を食いつくし闇夜へと飛び立っていった。

目覚めて、すっかり夜になっていることに気付いた。どうやら朝から日が沈むまですっと眠っていたらしい。

額から尋常じゃなくふき出している汗を拭う。息は荒く、着ていたシャツは汗でぐっしより湿っていた。

どうやらまだ生きる意思とやらは健在で、また俺はしくじったらしい。

そう、また日常に帰ってきた。

何をもって俺にこれ以上償えと言うのだろう。生きている限りあいつはどこまでも追っかけてきて、俺を痛めつけるサディズムに満ちた笑顔を俺に向けるんだ。もういい加減うんざりだ。

ふと気が付くと俺は、ほとんど自動的にラーメンの袋を開けていた。

もう苦笑しか出てこない。

ため息をついて、鍋でお湯を沸かして乾麺を放り込む。

三分で完成し、それをどんぶりに移し変えてテーブルに運んだ。

もうここまで来ると、苦笑って考え方は完全に頭の中から消えてしまつて、食べることしか考えていない。

締め付けるような空腹が、食うことへの期待感を煽り唾液が口の中に溢れてきた。

さあ来た！さあ来た！

「いただきます」

気が付けば笑顔だコンチクショウ！

両手をあわせ、箸で面をつまみ上げ、口へと運ぶ。

ぴーんぽーん。

だが、直前で遮られた。

一瞬イラツと来たが、すぐに居留守を決め込み食事を再開。

ぴんぽん。

またも、直前で妨げられたがあくまで冷静に……。

ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、  
ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、  
ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、  
ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、ぴんぽん、  
ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、

もはやここまで来ると連打に全力を注いでいるんじゃないかって  
くらいの豪快な鳴らしっぷりに、俺は迂闊にもドアを開けてしまっ  
た。

「どちらさんですか？」

そこに居たのはメイドさんだった。

さらさらの黒く長い髪、鼻梁は白人女性みたいにシュツとしてい  
て、目はその性格を現してか柔らかかった。

アニメとかに出てくるような非現実を、そのまんま現実に持ち込  
んだようなそんな印象を受けた。

「はじめまして」

その非現実は、軽やかな微笑を浮かべた。

危ない、危ない、コイツは危険だ。そう直感して急いでドアを閉  
めようとするとしつかり靴を閉まるドアに挟む。

「閉めないで下さいよ。別に怪しいものじゃありませんから」

微笑は相変わらず。逆にそれが恐ろしく思えた。

コイツはプロだ。そう確信した。

「あの、新聞は朝日で、宗教はヒンドウ教のシヴァ派なので帰ってもらってもいいですか？」

「いいえ帰りません」

すると、そのメイドのお姉さんはポケットから一枚の紙切れを取り出す。

「私はあなたのご両親から、直々に依頼されてこうしてやって来た次第なのです。これが契約書」

はいっと、その紙切れを手渡され見てみると、俺の現状に対しての救済をこの人に任せるみたいなのが書いてあって、署名の欄を見ていると確かに両親の筆跡でその名前が記されていた。

ふと、めまいがした。

何故両親に俺が引きこもってるってことが伝わった以上に、こんな胡散臭い人との間にこの契約を結んだってことにめまいがした。

「入っていいですか？」

「どうぞ、汚いところですが」

そのメイドさんを家の中へと招き入れる。

もはや拒む理由は無かった。両親が俺の現状を知った以上、恐らくこの状況は繰り返されるんだ。きつと。

六畳の部屋につくと、座布団を一枚押入れから引っ張り出しテーブルの前に用意し座らせると、俺はその反対側に座った。

「あのさ、飯くいながらでいい？ここの一週間何も食ってないんだ」

ラーメンの香りはもはや胃に毒だった。胃液が胃そのものを溶解しているに違いない。

「別に構いませんが、初対面の相手はかなり大胆ですね」

「飯を食おうとしている時に来るからいけないのさ」

恨めしげな視線で睨むと、いたただきますと改めてつぶやいて、麵をすすする。

若干麵が伸びていたせいもあってか、目の前の女のせいか、幸福感はそこまで大したことはなかった。

ラーメンをのんきに食っているとメイドが辺りを見回してから言う。「ところで、絶食一週間って本当ですか？この部屋もですが、私が聞く限りではあなたは経済的にそれほど貧しくある必要は無いと思うんですがね」

薄汚れた六畳の部屋、畳は完全に黄色く変色してて、壁はカビが自主制作で作り上げたアートが青く一部分を染めている。それもあってか若干かび臭い。

物は目の前のテーブルと最低限の食器が入っているダンボールと通販で購入したインスタント食品、と冷蔵庫に入ってるものだけ。洗濯機は備え付けのボロ。

「うちのものは仕事やめて、今の生活に入るに当たってほとんど売り払ったんだよ。金のためってのも有るけど、気分だよ。気分。ここ七日間の絶食も気分。ふと修行してみたくなつたのさ」

半ば自殺未遂だったのを、別の理由にすり替えた。

だが、実際そこまで貧乏では無かった。三年前まで馬車馬のように働いて、能力と過酷な労働で築き上げた財はまだ十分にあって、このあばら家であと何年かくらいは生活できそうであった。

「気分ですか。ならあなたの今の状況も気分なのですか？」

「気分だよ、気分」

めんどくさそうに言ってスープを全部飲み干す。

「うまいこと説得して、とっとと帰ってくれないかな？って切実に思ってる。」

「ところであなたは何者？契約書に業務についての内容は書かれてなかったみたいだけど」

「私の今やってることは、いわゆるレンタルお姉さんなんですよ」

「レンタルお姉さん」

聞きなれない言葉に、怪訝顔をする。

「まあ簡単に言ってしまうえば、あなたみたいな人達が社会に出れるまで手伝ってあげる。そういった仕事です」

嫌な可能性が頭によぎった。



だが、あくまでポーカーフェイスを守った。

「まさか、ボランティアでは無いでしょう？」

「そうですね。こちらもこれで生活を立ててる以上お金はもらって  
ます。おそらくすでに私の事務所には当面私がここに来るためのお  
金が振り込まれているはずですよ」

頭を何か馬鹿に重い鈍器で殴られたような気分がした。が、ポー  
カーフェイスは崩さない。

仕送りキャツシュバツケ！

もつと有意義に彼らには使って欲しかったのに、こんな惨めな！

「ああ、そう言えばまだ名乗っていませんでしたね。私、坂上穂波  
と申します」

「もう知ってるだろうけど、柚木薫。ところで、その服って制服な  
の？」

坂上穂波を指差す。

坂上穂波が着ていたのは、アニメとかでよく出てくるフリフリの  
ミニスカートのメイド服。ニーソックスやら、頭の用途不明のふわ  
ふわは何だ？生地とかも安物ではなくて、凝ってるのが分かる。ま  
た、着ている本人がバカみたいに綺麗つてのが現実感をよりいっそ  
う薄くしてる感じがいた。

「これは完全に私の趣味です」

「趣味かよー！」

「というか、態度表明のようなものですね。私はこの服を着ること  
によってその人に仕えるんだって気分転換するんです」

また、めまいがした。

この人は……………やる気だ。

もう完全に金は支払われているだろうし、目の前の坂上穂波が認  
めない限り坂上穂波は毎日俺の家に来るんだろう。

ポーカーフェイスは、あまりの落胆に崩壊した。

「どうしたんです？気分悪そうですね」

坂上穂波が、こちらを心配そうにのぞきこんでくる。

「なんでもない、なんでもない、なんでもないんだ！」

「そうですか……」

全力で身振り手振りで否定。

その視線が、いつそう惨めな気分を増幅した感じがあった

落胆した気分を無理やり振り払い、ポーカーフェイスを作り直して改めて坂上穂波をみた。

「私からの説明は大体終わりです。他に何か質問はありますか？」

「もう二度とここへ来て欲しく無いんですが」

「却下です。契約はすでにああなたのご両親と結ばれたものなのです  
そらきた！そらきた！

不安が確信にグレードアップ！

「なら、最後に一つ。どうしてあの両親が今の俺の状況を知ることが出来たんだ？」

「あなたのご友人に聞いたそうです」

「ごんっ、とまた頭を鈍器で殴られたような気分になったが動揺は見せずに無表情を保った。

俺の知る限り今の生活を知ってる友人なんてほとんど記憶に無い。俺は今の生活を誰かに言ったことも無ければ、誰も我が家には来なかった。

たとえばこう仮定しよう。誰かが、冗談交じりに「柚木って今ひきこもってるんだぜ」と言ったとしよう。それが人づてに伝わって俺の両親の耳に届く。両親は最近仕送りが止まっていたことや便りが無いことをきっかけに俺の素性を調べる。それで、前の会社を辞めて以降一切の仕事についてない事を知って今回のことになったと仮定しよう。

では何故せつかくの仕送りを使ってまで俺に坂上穂波を派遣したのか。

三年前みたいに馬車馬のように働かせてもう一度仕送りを得ることなんじゃないだろうか？上京するとき俺は半ば家を捨てているに等しかった。口やかましいあいつらと、兄どもを黙らせるために

大量に仕送りをしていた。

直接説得にも来ずに、坂上穂波を派遣した訳をもう一度考える。惨めさ以上に怒りがこみ上げてきて拳を握った。

ザムザが虫になった時の気分が手に取るように分かった。腹が立った。

「また、明日も来ますね」

坂上穂波はおもむろに立ち上がると、ジュラルミンケースを片手に玄関へ戻っていく。

「必ず来い！」

ほとんど叫ぶも同然でその背中に言った。すると、坂上穂波はこちらを振り向き、

「はい」

と、微笑して答えた。

何てことをしてしまったんだと、坂上穂波がドアを出た瞬間に思っただけ寒気がした。

嫌悪感。

自分に対しての嫌悪感。それは、黒く、背中にの一部に形を成したざわめきだった。

最初背中のごく小さな一部分だった黒いところがじわじわと、綿が水を吸収していくようにあっという間に全身に広がっていく。ざわめきも同じように広がっていく。

黒さとざわめきが全ての侵食を終えたとき、それは確かな形となつて目の前に現れた。

「よお」

限りなくこちらを見下しきつた目。嘲笑に歪みきつた口元。それは髪が短く、髭は無く、割と上等なスーツを着た青年だった。今と違った、昔の自分の姿。

毒虫になる前の働きまくっていたグレゴール・ザムザと、毒虫になった後のグレゴール・ザムザは、俺とコイツの比喩だ。

もう一人の自分が言う。

「お前がチンタラしてるから、あんな介入を許すんだ」

「じゃあ、俺にどうしろって言うんだよ！お前は」

「何度も言ったはずだぜ。働けばいいんじゃない？三年前みたい」

「それが出来なくなったから俺は」

「神経症のせい？あー、お前みたいなゴミが良くも言えたもんだぜ。いいか、お前の治療は既に終了している。お前は病気でもなんでもない。お前が何故ここにいるのか答えを出すのは簡単だ。

単純な話、お前が弱い。そうだ、たったこれだけのことなんだ。

お前が俺に何か発言する権利があるのか？ああ！」

何も言い返せずに奥歯を噛みしめた。

こいつの言っていることは、全くといていくくらいに正しい。

けれど、事実俺は何も出来ないでいる。活路があるとすれば、あいつの言うとおり三年前みたいに馬車馬になって働き詰めの生活を送ることだ。ただ、外に足が向かわないだけで……。

「お前は何なんだ！いつも無茶な要求ばかりかしてきて。お前は誰なんだ！」

「俺はお前だよ。別に大したことじゃない、それだけのことさ」

そう言つと、目の前のもう一人の俺は消えた。

次の日。

「おはようございます」

柔和に笑うメイド服の女「坂上穂波。

「はい、おはよー」

瞼が三分の一しか開いていない若干不潔な男「俺。

時刻は午前十一時／昨日と同じチャイム攻撃にたたき起こされ、坂上穂波を招きいれた次第。

「その袋は何？」

坂上穂波はちよつと大きめの紙袋を抱えていた。

「あなたの昼ごはんです」

そう言つと坂上穂波はその紙袋を冷蔵庫のすぐそばに置いた。

「昼ごはんを作るのも仕事なの？」

「はい。私がここですることの一つです」

「具体的に坂上さんはここで何をするんだい？」

「そういえば昨日お話してませんでしたね。私の仕事は週五日に三時間いて、その間にあなたの昼ごはんをつくり、あなたが話したいことがあればその時は話を聞きます」

「それによつて俺が社会復帰できるようになるって訳か」

皮肉に聞こえるように悪意を込めて言つてやった。

俺には坂上穂波を追い出すことについてあるアイディアがあった。

「まあ、つまりはそういうことになりますね」

「なら簡単だ！今すぐ外に出て、ハローワークに行く。そうすれば、お前は二度とここへは来ない。証明があればお前を帰らせることが出来る！」

策とは単純明快に、俺は抜け出そうと思えば抜け出せるんだつてことを示すことだった。

結構ざるだと自分自身思つてはいるが、結局これが一番効果的だという結論に至る。

坂上穂波は何かを言いかけて、口をつぐんだ。

「何だ？何か言いたいことがあるのか？」

「いえ…別に……」

「待つてる、今急いで準備する」

急いでシャワーをあび、髭をそり、髪を乾かし、もう何年も着ていなかったスーツを引っ張り出して着る。

鏡でみた自分は、若干髪が伸びてはいるがまさにもう一人の俺だった。

「今、俺が正常だつてことをお前に示してやるよ！」

玄関まで歩き靴を履く。坂上穂波は後ろからついてきて、彼女が靴を履き終えるのを待つて、ドアを開け外へと踏み出した。

そして俺は、そのままの姿勢で硬直してしまった。  
右足は確かに玄関の外へと踏み出しているのに、左足がぴくりとも動かない。

まるで楔が左足に打ち込まれてるかの様な気分だった。  
他から何とか姿勢をいじろうとしても、まるで動く気配が無い。  
ただひたすらに、変な汗が全身から吹き出し、何秒かしかたつてないはずなのにその時間が何十時間そうしているような感覚。背中がぐっしより湿ってきているような気がした。

「もう、良いですから……」

ナイフで胸を貫かれたような気分がした。

「まだだ、まだ俺は」

くぐもってはいいたが、辛うじて声だけは出た。

「良いですから、もう」

坂上穂波が後ろから抱きつき、そのまま後ろになげる。床にしりもちをつき、呆然と目の前の坂上穂波を見上げた。

「二十分です」

「な……にが……？」

「あなたはずっとあの格好で二十分も硬直していたんです」

「そんな……ばかな……」

「本当です。」

そう言うと、坂上穂波は自分がしていた腕時計を俺に渡した。

確かに、出発したときから二十分以上が経過していた。

「そんなことしなくても良いんですよ」

「しゃがみこみ、いたわるような目で俺を見る。」

「頼むからそんな目で見ないでくれ！」

不意に叫びが漏れた。

「違う、断じて違う！みんな俺を見下しているに決まっているんだ！」

「少なくとも私はそうは思っていないません」

そのままの目でやさしくきっぱり言い放つと、坂上穂波は俺を踏

み越えて部屋の中へと入っていった。

「何を……何をしてるんだよ、お前」

「昼ごはんを作るんです」

坂上穂波は、袋から適当な材料を取り出すと、残りを冷蔵庫にしまつていく。

「頼むから出てっつてくれ。こんな惨めな姿をさらして、屈辱以外のなにものでもないよ」

「出ていきます。けれどそれは、この昼ごはんを作ってから話す」

坂上穂波は、てきぱきと手際よく調理器具をそろえていく。

俺はもう一度立ち上がってドアに手を伸ばすが、今度は鍵が開いてるはずのドアが全く動かなくなっていた。

俺は諦めてトイレに入った。

逃げ場がそこにしか存在していないように思えて仕方が無かった。

排泄はいっさい行わず、ただ便座の上につづくまってシャツの背中や脇を湿らせていく。変な汗が流れ出る。

坂上穂波が調理を終えたのか、足音が近づいてきて、俺は丸くなくて耳をふさいだ。

「昼ごはんを作っておきました。あつたかいうちに食べてくれると嬉しいです。明日また来ます。それでは」

音は耳を閉じていても、ドア越しに聞こえた。

そして坂上穂波は外へと出て行った。完全に家の中に気配を感じなくなつてようやくトイレから這い出し、家の鍵を閉めた。

ヨロヨロと立ち上がり、なんとか六畳の部屋へと戻る。ジャケツトを投げ、ネクタイを解き、ベルトを外して、シャツを出すと少しだけ気分が楽になる。そのまま俺は、何もかけずに眠った。

目覚めると日は沈みかけている。汗に濡れすぎたシャツはすっかり冷たくなっていた。

シャツも肌着も脱いでその辺に投げると、ふと坂上穂波が作ったうどんがテーブルの上においてあった。

ふと、坂上穂波が作ったうどんがテーブルの上にあった。きつともう麺は伸び伸びで、スープを吸い込みきつた麺はきつと違う食べ物だ。あいつはきつと何にも考えないでこのうどんを作ったんだ。

そう思うと、少し笑えた。

どんぶりにかかったラップを外して、早速口へと運ぶ。

妙にしょっぱくて、食事は胃にしてみた。

翌日もやはり坂上穂波はやってきた。やはり、昨日と同じ格好で断って帰ってもらうことは選択肢にあつたし可能だったが、坂上穂波を招きいれた。

「うどんは良くない」

もつと違う言葉を言いたかったけれど、そっちは出なかった。

「すいません……あんまり深く考えていなかったもので、意外と私もテンパってたのかもしれない」

「そうか」

不意に、頬が自然と緩む。顔面の筋肉は動きが鈍く、不自然な感覚がする。

「それでは私は早速、今日の分の昼ごはんを作らせてもらいますね」  
そう言つと坂上穂波はキッチンへと入っていった。

俺は、後ろに倒れて仰向けになる。

珍しく体調がよく、快活だった。

昨日うどんを食べた後、もう一人は出てこなくて随分久しぶりに熟睡した。眠った直後だったというのに良く眠っていたと思う。

いつもは活動限界が来るまで、眠りたくても眠れなくて、限界が来てもほんの少ししか眠れないのだ。そうとも、昨日は随分眠っていた。

一体俺は、何によって眠らされていたのだろうか。

しばらくして、坂上穂波が昼ごはんを持ってきてそれを食べる。



十分ほどであつという間に片付き、坂上穂波はコーヒーを入れてテーブルの上に置いた。

テーブルの上は静かだった。坂上穂波はどうやら俺が話しかけな  
いかぎり話はしないらしい。

外は晴れていたが、悪い気分はしなかった。

一瞬何かを話そうと思ったが、黙った。

その場に流れている良い空気を吸い込むことの方が多分好きだと  
感じていたからだと思う。

妙な充足感。

外は晴れなのに気分は良かった。

あつという間に時間が過ぎ、坂上穂波が帰る時間がやってきた。

「それでは、私は帰ります、明日もまた来ましょうか？」

「いや、いい。当初の契約どつりにいこう。それと……昨日はゴメ  
ン」

坂上穂波が来たときに言えなかったセリフをようやく言えた。も  
ちろん目は見れなかったが。

「気にしなくて良いですよ。昨日は私もミスりましたし、チャラッ  
てことで」

微笑。やけに似合った。

「それでは、また来ますね」

「ああ」

坂上穂波は、ドアを閉めて去っていく。

靴が鳴らす音が完全に消えてなくなると、急に背中の小さな黒い  
ざわめきが騒ぎ出す。

よく知っている感覚。これは嫌悪だ。

ざわめきは凄まじい速度で侵攻していく。

もう一人が来る！

俺は台所へと急ぐ。冷蔵庫の陰にあつた焼酎を取り出すと、薄  
めもせずに一気にいの中にぶち込んだ。

眠らなければ。眠らなければいけない。

あいつの侵食を許しちゃいけない。

早く！早く！早く！

ほとんど一気飲みに近い形で飲み干すと、視界が一気に歪んで踏みはずして畳に倒れる。

ペースだのなんだの考えてるほど悠長じゃなかった。とにかく酔って眠る。それだけしか考えていなかった。

だが、意識は歪んでいたが完全に覚醒していて、眠りには遠い。ざわめきは侵食の速度を増していく。

嫌悪！嫌悪！嫌悪！

そうだあいつは嫌悪の化身。俺の一部。

ざわめきが全身を覆ったとき、やはり奴は現れた。直感で分かる。目を開けると、そいつはやはり黒いスーツを着ていて、惨めに横たわっている俺を見下ろして嘲笑の笑みを浮かべていた。

「たまに出てこないからって、調子に乗るんじゃないぞ、ゴミが」  
奇妙な違和感。

その日のもう一人の俺はいつもと違って、間が抜けて見えた。

「ハハハハハハハハハハ！！！！そうだ、俺はお前の事なんか完全に忘れてたぜ」

たまらなくって狂った様に笑うと、もう一人の俺の顔に憎悪の色を見た。

「お前、俺との関係をわかってんのか。わかって無いならまた教え込むぜ」

「分かってるさ！完全な主従関係！！そうさ、俺はお前に従うしか出来ない出来損ないの奴隷！！！！」

「分かってるじゃねーか、なら俺を煩わせるな」

「はっ、笑わせるなくそ野郎。今日こそ俺はお前をぶっ殺す」

惨めに這いつくばった姿勢から立ち上がり、もう一人をにらめつける。

もう一人の顔にあった憎悪の色はいつそう濃くなった。

「笑わせるなだど？それはこっちのセリフだ！お前のそうした試み

は何度も何度も失敗してゐることを忘れたか？一番近いのが断食による自殺だ。お前は恐れた。死ぬことを恐れた。だから今回もしくじった。下らない生きたいって思いがある限りお前に俺は殺せない」俺はまたゲタゲタと狂った様に笑った。

どうにも、もう一人の俺が言つてゐることがおかしくて仕方が無い。「そうさ、だが、怒つて殺せないものは笑つて殺すんだ。下らない、下らない、下らない！俺は俺を何度殺しても足りないくらい嫌いだし、言うまでもなくお前も嫌いだ。俺を取り巻く人間も全部嫌いだ！あと、お前は勘違いしてゐるようだから教えてやるが俺は坂上穂波も死ぬほど嫌いだ！だから俺は、笑い飛ばす。下らない喜劇みたいに全部笑い飛ばす！」

台所にある包丁を取り出し、躊躇無く、一切の力をもつて手首をぶつた切った。

アルコールがかなり回つてゐるのか、あるいは血管をうまく切れたのか、今まで手首を切つた時とは比較にならないほど血が流れ出した。「お前何を！」

「俺は笑う！一切を笑う！」  
出血してゐるほうの手首を振り回し、もう一人の俺の顔にぶつかける。

血が顔面いつぱいに飛散したもう一人の俺は、驚愕に顔を歪め、そのまま消えていった。

「へっ、ざまあねーぜ」

全身に力が入らなくなつて、もう一度その場に倒れた。  
俺はぼんやりと左手首から尋常じゃなく流れ出てくる血を眺めていた。

地面に落ちた血がどんどん広がつていき、横たわつた俺の顔に触れたとき「あつ、このまま俺は死ぬんだ」つて思った。

頬に触れる生暖かい感覚。死ぬ。確かな感覚。確信。

今まで越えられなかつた壁を、俺はあっさりと貫いたつて事を分かつた。

あまりにあっけなくて笑えたが、顔の筋肉をいじるのが精々で、なんの表情にもならない曖昧な顔をしていたと思う。

それから、だんだん頭がボーっとしてきて、やがてブラックアウトした。

ふと、意識が切れる寸前、誰かが部屋のドアを開けた気配がした。

目覚めたとき、生きてるんだなって何となく思えてきていささかがっかりした。

白で統一された空間。病院。俺はベッドの上に横たわっていて、左手首には包帯が巻かれている。

「起きた？」

ベッドのすぐ隣に座っている坂上穂波が言った。

今日はメイド服では無く、シャツとジーンズでメガネをかけていた。いつもと違って普通の綺麗な人になってる。

「帰った後で忘れ物に気がついて戻ってみたら、あなたが血を流して倒れているの見たの。急いで止血して、救急車を呼んだ」

変わらぬ微笑。それが憎たらしくてしょうがなかった。

「どうしてそのままにしておかないんだよ！ほっとけば俺は死んだし、もう一人の俺を殺せたのに…何故だ。…何故俺を生かした！」

「甘ったれないで！」

ぴしゃりと、坂上穂波は俺を封じ込めた。

同室の患者達が何があっただって顔でこちらを見ている。

「何がもう一人の俺よ！何のために私がいるのよ！そして何のための契約だ！」

坂上穂波は決して泣いては無かった。むしろ、ものすごく怒っていた。

「なんなんだよ、その態度は！生きることをなめるな！」

グーで思いつきり俺の鼻を殴ると、鼻にガツンと衝撃が走り、鼻血がでた。拭った血を見た時少しだけ落ち着けた気分がした。

坂上穂波は自分のしたことに気が付いて、気まずそうに目をそらす。

「ごめんなさい。やっちゃいけないことですね…取り乱して……」

坂上穂波は怒りから一転、困惑し、肩をすぼめて椅子の上で小さくなった。

「いいよ。あんたの思いは伝わってきたから」

そういう俺も坂上穂波を見てはいられなかったが、そのまま話し続ける。

「俺はどうしたらもう一人の俺に対抗できるのかまるで分からない。俺が今こうして生きている限り、あいつは嘲笑しながら何度もやってくる。そう、何度も、何度も。これは俺の問題で、坂上さんが側にいてくれても多分何も変わらないような気がするんだ」

言い終えると、坂上穂波は沈黙を守った。何かを考えてて、しばらくして答えが出たのか答える。

「そう、あなたの指摘は正しい。私は多分あなたに何もしてあげられないし、あなたの言うもう一人の自分は、あなたに統合されるまで何度も出てきてあなたを苦しめるのは間違いない」

「じゃあ、坂上さんは何のためにいるんだ？」

坂上穂波は答える。

「そのもう一人の自分があなたに統合されるまで、側にいて話を聞く。私にはそれぐらいしか出来ない」

俺は坂上穂波を見た。

坂上穂波はいつもと同じように微笑んでいた。いつもと同じように、悲しげに。

「鼻血が止まったら少し、外を歩きましょうか」

「分かった」

出来ないって選択肢は頭の中から消えていた。この人と一緒なら、きつと大丈夫。そう思えてきた。

鼻血は思っていたよりも早くに止まり、ベッドから出るとスリッパを履く。

「さて、行きますか」

「はい」

「一つだけいいですか？」

「何でしょうか？」

「歩いている間、手を繋いでいてもらえますか？」

「良いですよ」

左手を俺に差し出し、それを右手で握る。そして、二人並んで病室を出た。突然足の震えが来て、思わず坂上穂波の手を握ると、彼女はその手を握り返し「だいじょうぶですよ」とだけ言って歩き出す。

それに引つ張られるように、俺は坂上穂波の後をあるいた。

病室を出たあと、俺はまるで酩酊しているかのような気分だった。それも悪い方に。

冷や汗がどうにも止まらない。

人を見るたびに、その人達全員に見下されているかのような気分になった。

外にはもう一人の俺が、何人もいて、誰もがあの嘲笑を、悪意と敵意をもって俺を見ている。

そんな気分がピークに達すると、俺は立ち止まり、怖くなって坂上穂波の手を握った。その度に坂上穂波は立ち止まり、握り返す。

やがて回復して、俺が歩き出すと、彼女もまた歩き出す。

そんなことをずっと続けていた。

何度も立ち止まり、手を握り、握り返され、やがて歩き出し、そんな工程をずっと繰り返していた。

何十分、俺には何時間にも感じられた時間が過ぎて、歩き続けた先ようやく元の病室にたどりついた。

自分のベッドにたどり着くとそれに座って、深呼吸する。

何日も呼吸してなかったかのような気分がした。

背中や脇はいつかと同じようにぐっしょりと湿っていて、冒険の過酷さを物語っている。

「ありがとう」

絶え絶えの息で、なんとか伝えた。微笑みは作れず、引きつった笑顔だったと思う。

「また来ますね」

そう言っただけで坂上穂波は微笑むと、俺は「頼む」とだけ言った。

「それでは」といって去る坂上穂波を見届けると、ベッドの中にもぐりこんで声を立てずに泣いた。

もう無くしてしまったと思ったっていた感覚が少しだけ戻るのを感じながら。

静かに。

静かに……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8356j/>

---

背中の毒虫

2010年10月8日14時45分発行